

	<p style="text-align: center;">新入生へのひとこと</p> <p>若いときに読まない、なかなかそれ以後は手にとることのできない本があります。たとえば、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』や『罪と罰』、フランツ・カフカ『城』や『審判』、トーマス・マンの『魔の山』などはそうでしょう。大学生のうちに読んでおくことを勧めます。子どもの本にも、哲学的思索に誘う本があります、「なぜ、こうであって、これ以外であってはいけないのですか」(トーベ・ヤンソンの『ムーミンパパの思い出』)。元気を出すには、夏目漱石の弟子たち、とくに世話のやける弟子であった森田草平(米松)、小宮豊隆、鈴木三重吉宛の手紙などがいいかもしれません。岩波文庫に抄録があります。いずれにしても、本居宣長のいうように、「とかく思ひくづをるるは学問に大いにきらふことぞかし」。励んでください。</p>
講義のテーマと内容	
<p>シリーズ1 《古典と私》： 自己と他者</p> <p>私自身が哲学に心魅かれたのは、哲学があたりまえとされていることですら根底に立ち返って考えなおす営みだからです。哲学がそういう営みだとくっきりと私に印象づけたのは、デカルトの懐疑でした。デカルトはこう考えます。</p> <p>私は感覚を通じて知識の大半を得ている。ところが、感覚には錯覚がつきものだ。もし、私がかけて疑い得ない真理を入手しようと思うなら、一度でも私を欺いた感覚を頼りにすることはできない。しかし、感覚が誤りであるならば、私が目の前にしているこの机、紙、窓の外の景色もほんとうは存在していないのかもしれない。ひいては世界全体が存在していることすら疑わしくなるではないか。いやそれどころか、この私が存在していることすらも疑わしい。</p> <p>この続きは、授業で。</p> <p>20世紀初頭、フッサールがふたたびデカルト的懐疑をみずから遂行します。そこでは、「我」である点では私と同等でありながら、私とは異なる「我」である存在、つまり他者の存在が問われたのでした。時間の余裕があれば、哲学的思考にとって 他者 の占める位置について、フッサール、サルトル、レヴィナス、デリダの現象学的他者論を紹介しながら若干お話しいたします。</p> <p>シリーズ2 《現代と私》： 倫理学は、今、何を問題としているか</p> <p>現象学の研究から出発した私が大学院生のころ、日本には、社会のなかの具体的な倫理的問題に対処する応用倫理学が急速に導入されつつありました。私も若手研究者のひとりとして、そのなかの一部門である生命倫理学や環境倫理学に関わりました。そして今、私は、倫理学一般に研究を広げています。</p> <p>授業では、まず、倫理と倫理学の違いをお話しします。個人が抱いている価値観や信念は、いくら立派なものであっても、たんなる個人の意見であって、それがそのまま倫理学という学問や認識になるわけではありません。20世紀前半の倫理学はそれを痛烈に反省したのでした。</p> <p>そこを確認したあとで、1960年代以降に登場した応用倫理学が扱う諸問題をお話しします。脳死と臓器移植、安楽死などを論じる生命倫理学が、どのような意味でどれほど斬新な倫理的問題に直面したのか。地球規模での環境危機に対処する環境倫理学が、どのような意味でどれほど新奇な倫理的問題に直面したのか。コンピュータの発達に対応する情報倫理学にとって、何が新しい問題だったのか。さらには、9.11の衝撃。グローバルな市場経済の広がりや格差の拡大。これらの新たな問題にたいして、倫理学は昔から蓄積してきた倫理理論によって応答を試みるわけですが、授業では時間のゆるすかぎり、これらの問題について、今、倫理学は何を問っているのかをお話ししたいと思います。</p>	
リレー講義の参考文献	
<p>(シリーズ1) ルネ・デカルト、『省察』、井上庄七訳、中公クラシックス、2002年/山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2006年。 エドムント・フッサール、『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波文庫、2001年。</p> <p>(シリーズ2) 品川哲彦、『倫理学の応答能力』、世界思想社、刊行予定。 品川哲彦、『倫理学の話』、ナカニシヤ出版、刊行予定。 ジェイムズ・レイチェルズ、『現実をみつめる道徳哲学 安楽死からフェミニズムまで』、古牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房、2003年。功利主義にシフトしていますが、全体に目配りの聞いた書です。 担当者のウェブサイトも参照(http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsina/)</p>	

二回生以降に展開される授業内容（予定）

多くの年度、担当している【哲学倫理学専修ゼミⅠ】【同Ⅱ】では、倫理学の文献を素材にして、哲学書を読むときには一つ一つの語をどのように注意し、どのようにして論理を読みとっていくのかを伝えたいと考えています。この授業は、あえて「君たちを鍛える場」をめざしています。というのも、結局は、君たちひとりひとりが読む能力を身に着けていかないとけないからです。

【哲学倫理学専修研究Ⅰ】【同Ⅱ】では、他の教員とともに哲学・倫理学の重要な思想や理論を教えます。

2・3年次配当の【倫理学概論 a】【倫理学概論 b】では、重要な倫理理論を私の能力のおよぶかぎり受講生にとってわかりやすく展開したいと心がけています。【倫理学概論 a】では、重要な倫理理論のいくつか（自己利益にもとづく倫理観、他者への共感にもとづく倫理観、義務倫理学、功利主義）を紹介しています。【倫理学概論 b】では、1970年以降の倫理学の流れにしたがって、自由主義（リベラリズム）と共同体主義（コミュニタリアニズム）の対立を軸にしてとりあげてきました。受講生の反応は「おもしろい」「わかりやすい」「熱意に富んだ授業」「むずかしい」いろいろです。最も特色ある反応は、「品川先生のキモカワなキャラクターが存分に活かされた授業」というものでした。「キモカワなキャラクターが存分に活かされた授業」とは、私自身には、どうかと思いますが、まあこのひとは波長が合ったのでしょう。

【哲学倫理学専修ゼミⅤ】【同Ⅵ】では、卒業論文の指導をしますが、どんな題目の卒業論文を指導してきたかは、左の頁に URL を記したウェブサイトのなかの「講義」のページで紹介しています。その他、【哲学倫理学専修研究Ⅲ】【同Ⅳ】あるいは【倫理学演習 a】【倫理学演習 b】などを担当する年度もあるでしょう。

専門分野の紹介

私の現在手がけている研究主題は、およそ、次のとおりです。

(1)倫理の基礎づけ 倫理が倫理として成り立つ根拠は何なのか。いいかえれば、いかなる根拠から、私（たち）は倫理的であるべきなのか。これは倫理学の中心問題のひとつです。近代以降の倫理理論の正統（たとえば、社会契約論、カントの義務倫理学、功利主義がその例です）は、正義や権利を基礎にすえる傾向があります。これらの規範は基本的には対等な関係を前提としています。これに対して、それだけでは的確に捉えられない関係に対応して、責任やケアを基礎におく倫理理論があります。私の関心は、これら異なるタイプの倫理理論の対立的で、場合によっては、相互補完的な関係にあります。

(2)応用倫理学 生命倫理学、環境倫理学の研究については、具体的な問題というよりも、むしろ、(1)の一般的な研究の方向にしたがって、「人間の尊厳」や「人格」といった基礎概念や「人間中心主義」「非人間中心主義」といった倫理理論のタイプに重点をおいていますが、依然として続けています。

(3)現象学 私のそもそもの研究の出発点だった現象学については、とくに相互主観性や生活世界の分析について研究を続けています。

(4)Hans Jonas 研究 上の(1)(2)(3)すべてに関わっている哲学者に、ドイツ生まれのユダヤ人 Hans Jonas(1903-93)がいます。私はここ数年当初の予定以上にこの哲学者の研究に深入りしました。若いころにはけっして扱うことがないだろうと思っていた神や形而上学の問題にも視野を広げております。なにぶん、Jonas は、この世界を創造した愚劣な神とこの世界を超越している至高神との対立を説くグノーシス思想の研究者として出発し、紆余曲折に富んだその哲学的経歴の晩年には、彼の母もそこで殺されたと思われるアウシュヴィッツを経験した人間に、いかなる神を考えることができるのか、という問題にとりくんだ人なのですから。

その分野を知るためのおすすめ図書

- (1) 品川哲彦、『正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版、2007年。
リチャード・ローマン、『道徳の哲学者たち』2版、山内友三郎・榎則章監訳、ナカニシヤ出版、2001年。
アラスデア・マッキンタイア、『西洋倫理思想史』上下、菅豊彦他訳、九州大学出版会、1985年。
J.L. マッキー、『倫理学 道徳を創造する』、加藤尚武訳、哲書房、1990年。
D.D. ラファエル、『道徳哲学』、野田又夫・伊藤邦武訳、紀伊国屋書店、1984年。
- (2) ロバート・M・ヴィーチ、『生命倫理学の基礎』、品川哲彦監訳、メディカ出版、2003年。生命倫理学の全体を見渡す書ですが、第一章は倫理学入門として適切。
加藤尚武、『応用倫理学のすすめ』、丸善、1993年、同、『環境倫理学のすすめ』、丸善、1990年。
- (3) エドムント・フッサール、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、細谷貞夫・木田元訳、中公文庫、1995年。
木田元、『現象学』、岩波新書、1991年。
- (4) ハンス・ヨーナス、『アウシュヴィッツ以後の神』、品川哲彦訳、法政大学出版局、2009年